

第2回野菜需給・価格情報委員会消費分科会における夏秋野菜の消費動向等についての意見概要

1 日時

平成23年6月22日(水)14:00~16:00

2 場所

独立行政法人農畜産業振興機構 南館1階会議室

3 概要

(1) 特にお聞きしたい論点(資料1)の説明

資料1により説明。

(2) 最近の野菜の需給・価格動向について(資料2)の説明

- ・はくさいは、特にほうれんそうの出荷制限指示以降、茨城県産の入荷が減少、卸売価格も急落して兵庫県産との価格差発生。
- ・キャベツは、全ての品目で出荷制限指示がなかった愛知県産、神奈川県産が大半を占め、風評被害はなかった模様。
- ・ほうれんそうは、主産県の多くが出荷制限指示を受けて供給量が大幅減少。出荷制限指示のない埼玉県産と一部地域に出荷制限指示を受けた千葉県産に価格差発生。
- ・レタスは、出荷制限指示の該当品目ではなかったが、ほうれんそうの出荷制限指示以降、茨城県産の価格が大幅下落。
- ・きゅうりやトマトは、出荷制限指示の該当品目ではなかったが、他の品目で出荷制限指示を受けた県は価格が安い傾向。
- ・だいこん、たまねぎ、にんじんは、震災、出荷制限指示の影響は概ねなかった。

(3) 野菜の消費関連資料(資料3)の説明

- ・1人当たりの購入数量は、全体では昨年は4月以降前年を下回って推移し、特に猛暑で高値だった9~11月は顕著。12月以降は前年並みに回復。だいこんやはくさいは消費の少ない夏と需要期の冬とでは大きな差があり、きゅうりやトマトは夏が需要期、にんじんやたまねぎは通年安定的に推移。
- ・1人当たりの購入金額は、全体では9月までほぼ前年並みで推移し、猛暑で高値だった10月、11月は対前年1割増加。1~3月は前年並みで、昨年価格高騰した4月は対前年5%減少。2年連続で北海道が不作だったたまねぎは、北海道産の出回り始めの8月、9月を除き前年より高く推移し、4月は前年並み。
- ・1人当たりの品目別年間購入数量は、全年齢平均でキャベツが増加、きゅうり、トマトが減少傾向、だいこんは減少が顕著。だいこん、きゅうりやトマトは全年齢階層で減少し、はくさいは50歳以上で年々減少傾向。
- ・東京都区部の小売価格は、たまねぎ、にんじん以外が10月、11月に価格高騰。
- ・年齢階級別摂取量は、全世代で目標値の350gには達していない。20代は特

に摂取量が少なく、減少傾向。

- ・家計での外食支出金額は、震災があった3月は対前年比81%と大きく減少。外食店の売上高及び利用客数も3月は大幅に減少し、特に高級店で顕著。
- ・6～8月の気温は全国的に平年並みか高めの予報で、降水量は全国的に概ね平年並みの見込み。

(4) 夏秋野菜の需要・消費の見通しに関する各委員からの意見

ア 野菜全体の目下の消費動向

(ア) 景気、天候などの要因による消費動向

- ・景気が低迷しており、消費減退傾向が根底にある。
- ・生育状況は概ね良好で、順調な出荷がされているものの、外食・業務用を中心とした消費減退が継続している。

(イ) 震災、原発事故の影響による消費動向

- ・震災の影響は業種・業態により異なっており、特に外食における消費減退傾向が強い。
- ・原発事故に伴う消費減退は、一時落ち着きを見せていたが、お茶からセシウムが検出されたところから再び現れてきている。
- ・学校給食などでは子供の食に関する安全性への高い関心から特定の産地を避ける意向を示しているところもある。

(ウ) 野菜全体の販売状況

- ・夏の節電の影響を前提に、家庭での非加熱メニューへの需要やサマータイムによるライフスタイルの変化に対応した販売戦略が必要。特に非加熱メニューの代表であるサラダ食材の需要や、家庭での揚げ物の減少による総菜・中食需要の伸びに着目している。

しかしながら、非加熱での調理では、消費量が減少するという問題がある。キャベツの場合、店では1/8カットで販売するケースもある。

- ・原発事故と野菜産地との関係については、消費者の中に様々な考えの人が存在するので、それぞれに合わせて色々な選択ができるよう、同種の野菜について複数産地のものを併売することとしている。

イ 夏秋野菜主要6品目の今後（7～10月）の見通し

(ア) 夏秋キャベツ

- ・キャベツは現在、量が出てきていて価格が下がっており、売りに上げに繋がらない。引き続き夏場も販売環境は厳しいと見ている。

(イ) たまねぎ

- ・年間通して需要が存在する。
- ・秋以降は今後の北海道の出来次第であるが、湿害や雹害による生産への影響を懸念している。

- ・たまねぎは輸入が常態化している。

(ウ) 夏だいこん

- ・だいこんは主に煮物としての需要が中心であり、夏場は良い産地がないこともあり需要が少ない。

(エ) 秋にんじん

- ・季節による需要の変化はあまり見られない。
- ・にんじんは輸入が多い。

(オ) 夏はくさい

- ・夏場は他の季節と比べて需要が少ない。メニュー提案をしても売れない。
- ・夏はくさいは、需要がない中であまり作り過ぎないように計画的な生産を国も含めてしっかりやるべき。

(カ) 夏秋レタス

- ・夏場は元々サラダ需要があることに加え、今年は節電による非加熱メニューの材料として需要は伸びるのではないかと。

ウ 夏秋野菜のうち東北地方が主産地となる果菜類の今後（7～10月）の見通し

(ア) 夏秋きゅうり

- ・原発事故に伴う節電ムードから、非加熱食材が伸びると予測しており、きゅうりはサラダ需要が見込まれることから、需要増が期待される。
- ・この期間のきゅうりについては、東北の産地が中心となるが、客からのニーズもあり他県産も併売し、選択購入できるよう販売する予定。

(イ) 夏秋トマト

- ・原発事故に伴う節電ムードから、非加熱食材が伸びると予測しており、トマトはサラダ需要が見込まれることから、需要増が期待される。
- ・この期間のトマトについては東北が主産地となるが、他産地との併売にする見込み。

エ 被災地支援の取組みを含めた販売活動の動き

- ・産地フェアのチラシ販売、産地農協による対面販売、自治体とタイアップしたフェア等を実施。
- ・被災地応援フェアを行うことにより、消費者からは頑張ってもらいたいとの反応がある一方で、本当に大丈夫かとの問い合わせも増える。
また、特別フェアを行うことにより、無用の不安を喚起する恐れがあるので通常通り販売してほしいとの産地からの要望もある。
- ・消費者の安全・安心の確認は、テレビなどのマスコミからの情報だけでは満足できない状況。生産者と消費者が直接対面で確認することで信頼関係を構築できると考える。

(5) 委員の意見を踏まえた野菜需給・価格情報委員会への報告

上記(4)の各委員の意見を小林座長が取りまとめ、各委員に了承を得た上で7月8日開催の第10回野菜需給・価格情報委員会に報告することとなった。